

兵庫県城崎町方言における揺れ

佐 伯 哲 夫

〔キーワード〕 揺れの判定 集団内の揺れ 上下親疎 性差 新方言

I この調査は平成元年7月に、関西大学国文学科の学生諸君と共同で行ったもので、本報告はその責任者（兵庫県、現豊岡市の生れ）の名前をもってする。

インフォーマント（言語資料提供者）は兵庫県城崎郡城崎中学校（竹内久満校長）の第2学年の2クラス、男子生徒35名、女子生徒27名の計62名である。

城崎中学校は城崎町湯島にあり、生徒はその町の居住者である。城崎町は兵庫県の北部（北但馬）に位置し、円山川およびその支流大淵川を中心にかたまる温泉町で、山陰本線城崎駅をもつ。また志賀直哉の『城の崎にて』の舞台としても知られるところである。人口は平成2年5月1日現在で、4,854名。調査には鎌田良二氏案の「方言による話しことばの調査」の表と「近畿・中国方言調査表」をそのまま借りたが、これには、具体的な記述を要求する個所と設定された表現形態の中からの選択を要求する個所とがある。表の配布および回収には学生の有志数名が当たった。その間約60分。処理と集計には学生諸君が当たり、後日、あらためて佐伯が当たった。

II ここでは「方言による話しことばの調査」に限って報告する。まず、揺れの有無の判定法について述べる。たとえば

<1、近所の店で物の値段をたずねるとき「いくら」と聞きますか、「なんぼ」とききますか。>では二者択一の答が出るが、今この集計結果をみると次のようである。以下の計は、無答もあるし、それに取り上げた項目のみの計としたので、35、27、62に満たないことがある。表中の語はおおむね上が共通語形、下が方言形である。

近所の店で	男	女	計
いくら	18 △	18 △	36 △
なんぼ	17 △	9 △	26 △
計	35	27	62

そこで、これを、城崎町の中学生層を母集団とする標本としての条件を備えていると仮定し、男、女、計それぞれに比率の検定（ χ^2 検定）を行ってみる。危険率は5%で、計算結果が次のようであれば、

ば、双方の比率に有意差がない、すなわち揺れていると判定することにする。

$$\chi^2 = \frac{(\text{実測値}_1 - \text{理論値})^2}{\text{理論値}} + \frac{(\text{実測値}_2 - \text{理論値})^2}{\text{理論値}} < 3.841$$

ところが、

$$\text{男 } \chi^2 = \frac{(18-17.5)^2}{17.5} + \frac{(17-17.5)^2}{17.5} = 0.014 \times 2 = 0.028 < 3.841$$

(「いくら」と「なんぼ」の間に揺れがある)

$$\text{女 } \chi^2 = 1.5 \times 2 = 3.000 < 3.841 \text{ (同上)}$$

$$\text{計 } \chi^2 = 0.806 \times 2 = 1.613 < 3.841 \text{ (同上)}$$

このように揺れがあると判定されるものに△印を、そして優劣があると判定される場合、すなわち計算結果が3.841より大のときは、それぞれに○×の印を付けることにする。先の表にはすべて△印が付けてある。以下、この要領で表示する。

	(大阪の店で)			(東京の店で)		
	男	女	計	男	女	計
いくら	25○	22○	47○	30○	23○	53○
なんぼ	10×	4×	14×	5×	2×	7×
計	35	26	61	35	25	60

生活圏では共通語形「いくら」と方言形「なんぼ」とが共存するが、生活圏を離れると方言形がかけをひそめる。

<2、捨てる> (記述要求)

	(近所の人に)			(大阪の人に)			(東京の人に)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
すてる	21△	15△	36○	30○	20○	50○	31○	22○	53○
ほかす	13△	8△	21×	2×	4×	6×	1×	3×	4×
計	34	23	57	32	24	56	32	25	57

生活圏では男女とも共通語形「すてる」と方言形「ほかす」が共存するが、全体的には共通語形「すてる」が優勢。生活圏を離れると方言形がかけをひそめる。

<3、降っている—から> (記述要求)

「降っている」と「から」に分けて整理するが、ここでは揺れの調査が目的なので、上位の2～3形に限って取り上げることにする。

	(近所の人に)			(大阪の人に)			(東京の人に)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
ふっている	2×	2×	4×	11△	10△	21△	15△	13△	28△
ふっとる	29○	24○	53○	18△	11△	29△	14△	10△	24△
計	31	26	57	29	21	50	29	23	52

生活圏では方言形「ふっとる」が優勢だが、生活圏を離れると方言形と共通語形との間に揺れが見られる。これ以外の形として共通語くずれの「ふってる」がいくらか見られる。

	(近所の人に)			(大阪の人に)			(東京の人に)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
から	8△	5×	13×	15△	19○	34○	21○	19○	40○
しけえ	12△	14○	26○	7△	5×	12×	6×	5×	11×
計	20	19	39	22	24	46	27	24	51

「しけえ」には「しけえに」「しけー(に)」「しけい(に)」「しけ」を含める。全体的には、生活圏では方言形「しけえ」が優勢だが、生活圏を離れると、共通語形が優勢になる。また、男子は女子に比べ、「しけえ」と「から」の間に使用心理の開きのあまりないこと、さらに男子においては、女子と違って大阪も生活圏に準じて意識されていることなどがわかる。なお、これ以外の形として「で」「さかい」がいくらか見られる。

<4、いたよ> (記述要求)

あなたがあなたのお母さんに対して——話し手と相手は一定。話題の人物の上下・親疎による使い分け。検定は互いに近い2数値について行った。?は合計数値が5未満で検定に耐えないもの。

	(住職・校長先生が)			(年下の男が)		
	男	女	計	男	女	計
いた	6 △	3 △	9 △	2×	3 △	5×△
おった	11△△	8△△	19△△	30○	19○	49○
おんなった	13△	14△	27△	0 ?	4×△	4 △
計	30	25	55	32	26	58

	(父親が)			(弟が)		
	男	女	計	男	女	計
いた	12△△	4 △	16×△	4×	3×	7×○
おった	17△	17○	34○	32○	21○	53○
おんなった	6 △	5×△	11 △	0 ?	1 ?	1 ×
計	35	26	61	36	25	61

話材としての人物が住職・校長先生のように相手より上の場合、男女を問わず、方言形「おんなった」(尊)と共通語形「おった」の間に揺れが見られる。また「父親が」の場合は相手より目上で、さらに身内という条件が加わる。結果は、男子の場合「おった」「いた」の共通語形の間で揺れを見せるが、女子の場合は「おった」が優勢で、揺れは無視してよい。女子で「おんなった」が×になっているのは、検定の組み合わせがたまたまこうなったことによる。また、「年下の男が」「弟が」の場合は、それぞれ相手より目下、

目下で身内、の条件下にあるが、これらはともに「おった」が優勢で揺れは無視してよい。なお、これらに後接する終助詞の中では「で（-）」が一番多い。

<5> (選択または記述)

新方言の模索に関わる質問が用意されている。井上史雄(1985)によれば、「新方言」とは、次の三つの性質を持った言語現象である。

- (1) 標準語として認められている形と違うこと。
- (2) 現在の若い世代に向けてなお使用者が増えつつ(勢力を拡大しつつ)あること。
- (3) 話し手達自身が、非標準語として扱うこと(改まった場面よりは、ふだんの場面で多く使うこと。)

5-1 夏蜜柑の味は?

親しい友達と話す場合、男子は「すっばい」で揺れは無視してよいが、女子は「ずっばい」と「すいい」の揺れを見せる。また、見知らぬ東京の人と話す場合、男女ともに「すっばい」で揺れは無視してよい。「すっばい」は共通語、「すいい」は共通語「すいい」の方言化した形と見ることができる。方言形としては、わずかではあるが「すっぺー」などがある。

5-2 塩や海水の味は?

親しい友達と話す場合、男子は「しょっばい」「しおからい」「からい」の間に揺れを見せるが、女子は「しょっばい」で、揺れは無視してよい。また、見知らぬ東京の人と話す場合は男女とも「しょっばい」「しおからい」「からい」の間に揺れを見せる。「しょっぺー」系もいくらかあるが、これはもう方言形であろう。ちなみに、井上(1985)では「しょっばい」を新方言としている。

5-3 わきの下や足の裏をさわられると?

親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も、そして男女とも「こそばい」「こしょばい」の揺れを持つ。「こしょばい」は、数こそ少ないが男子にある「こちょばい」などとともにも新方言とすることが出来るかもしれない。

5-4 うで時計をうでに～。

親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も、そして男女とも、「する」「つける」「はめる」の揺れを持つ。

5-5 蚊に～。

親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も、そして男女とも「さされた」「かまれた」の揺れを持つ。

5-6 線をひいたり、長さをはかったりする道具。プラスチック製で15～20センチぐらい。

親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も、そして男女とも「じょーぎ」で、揺れは無視してよい。

5-7 紙をかべなどに、はりつけるための道具。

男子は、親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も「おしびん」で、揺

れは無視できる。だが女子は、親しい友達と話す場合「おしびん」で、揺れは無視できるが、見知らぬ東京の人と話す場合は「おしびん」「がびょう」の揺れを持つ。

5-8 ホッチキス（紙をとじる道具）の中に入れるもの。

親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も、そして男女とも「はり」「しん」「は」の揺れを持つ。

5-9 土いじりをする時に使うもの。地面に穴をほる道具。長さは25センチぐらい。

男子の場合は、親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も「スコップ」で、揺れは無視できる。だが、女子の場合は、親しい友達と話す場合も、見知らぬ東京の人と話す場合も「スコップ」「シャベル」の揺れを持つ。

5-10 かけっこ（走り競争）の時、一番最後にゴールインする人のこと。

親しい友達と話す場合は、男女とも方言形「びり」「びりけつ」「べべ」の間で揺れがみられるが、見知らぬ東京の人と話す場合は、男女とも「びり」で、揺れは無視できる。

<6>（選択）

全50項目について、それぞれ「1、使う」「2、聞く（自分はずかしくないが）」「3、使わない（聞いたこともない）」のいずれかを選ぶ。男、女、計の、特に計を主に、各数値の最大のものを選び上げる。〔使う〕の<>には、使う、聞く、使わない、の%を入れた。

〔使う〕13、よーけ（たくさん、おおぜい）<77,21,2> 29、おとつい（一昨日）<89,11,0> 30、なすび（なす）<87,13,0> 31、みずくさい（水っぼい、水けが多くて味がうすい）<94,6,0> 35、ちりめんじゃこ（しらす）<82,11,7> 36、さんぱつや（理髪店）<84,13,3> 37、べけ（×印、バツ、ばってん）<94,6,0> 38、たく（煮る）<79,15,6> 39、きつい（きびしい）<74,19,7> 45、なおよす（かたづけ）<57,27,16> 47、ぬくめる（あたためる）<81,16,3>

〔聞く（自分はずかしくないが）〕2、ねき（すぐそば）12、ぎょうさん（たくさん、おおぜい）14、はく（（手袋を）はめる）<女子は使わない> 20、きばる（がんばる）24、しんきくさい（じれったい）26、あんじょう（ちゃんと、うまく）<男子は使わない> 40、けったくそわるい（いまいましい）41、すこい（ずるい）50、わや（だめ、むちゃくちゃ）

〔使わない（聞いたこともない）〕1、やつす 3、めばちこ 4、つづくる 5、もむない（おいしくない）6、にぬき（ゆでたまご）7、おじゃみ 8、そげ（木片のとげ）9、おとがひ 10、えーし（金持ち）11、おとんぼ（末っ子）15、さす（（手袋を）はめる）16、きる（（傘を）さす）17、かたげる（かつぐ）18、になう（同）19、いなう（同）21、いちびる（調子にのってさわぐ）22、はんなりした 23、じょらくむ（あぐらをかく）25、あも（餅）27、おむし（味噌）28、やぜん（昨晩）32、こそぼる（くすぐる）33、かんとだき 34、なんば（とうもろこし）42、ずつない（つらい、苦しい）43、だいじない（さしつかえない）44、だんない（同）46、なきみそ（泣き虫）48、むさんこ（むおみに）49、もんび（祝日）

Ⅲ-1 次にこの調査の周辺の資料を補足しておく。豊岡市はこの城崎町を包むように接し、その南北に広がっている。ここでは、豊岡の南部（戸牧^{とぼ}）に住む50歳代の男性1人の、同じ調査（佐伯実施）結果のうち、城崎中の男子と異なるところを挙げてみる。

<3、降っているから>の「から」について。生活圏では城崎の「しけえ」とは異なる「しきゃー」が現れる。より古い方言形。

<5-2、3>生活圏では「かりゃー」「こそびゃー」が現れる。より古い方言形。「いやー」はa i 連母音の方处的な変。

<5-7>「がびょう」ではなく、「びょう」が現れる。このあたり、新方言の育つ可能性がある。

<5-9>「スコップ」(蘭)ではなく、「シャベル」(英)の形。方言差をもつ外来語。

<6>〔使う〕としたもので、城崎中(計)のそれと異なるものを挙げる。城崎中で〔聞く〕優勢に△を、〔使わない〕優勢には×を付けた。

6、にぬき× 8、そげ× 18、になう× 20、きばる△ 24、しんきくさい△ 46、なきみそ× 50、わや△

逆に、城崎中(計)が〔使う〕としたもので、豊岡と異なるものを次に挙げる。二つである。△×は豊岡におけるそれで、前に準じる。

35、ちりめんじゃこ× 45、なおす△

城崎中(計)で「ちりめんじゃこ」の使用が極めて優勢なのは、城崎が津居山港により近く位置するからであろう。45については、豊岡方言で「なつべる」。

Ⅲ-2 加藤和夫(1987)には豊岡市も調査地点に選ばれているので、語彙・表現で本調査のそれと同じものを拾ってみる。

<1>生活圏では、豊岡の老・中年が「なんぼ」の方言形、若年で「なんぼ」「いくら」に揺れ、少年が「いくら」の共通語形。

<3>原因・理由の「から」は豊岡の老年が「しきゃー」の方言形と「から」。中年が「で」「しきゃー」、若年が「で」「しきゃー」「から」の揺れを見せるが、少年は「から」。ちなみに、岡田莊之輔(1977)には「シキヤーが美方郡東部・城崎郡・豊岡市・出石郡西半であり、シケーは、城崎郡南西部と養父郡である。」とある。これに従えば、「しけー」は岡田調査(多分1960より前)以後、北上してきているということであろう。ただ、録田良二(1987)では、城崎町の場合、中学生はもとより50~60歳代も「しけ(-)」ととらえられている。湯治の町ということで、飛石的に北上してきたことも考えられる。

Ⅲ-3 国立国語研究所(1966)では、城崎町に近く、山陰本線に駅を持つ竹野町竹野、豊岡市大開通(被調査者はどちらも男性1、70歳代と50歳代、調査者は岡田莊之輔)が調査地点に選ばれている。ここでは、本報告の事項に関連するところを拾ってみる。

<1、いくら>竹野、豊岡ともにナンボ。

<2、捨てる>竹野でホカス、シテルの揺れ。

<5-1、酔っぱい>竹野、豊岡ともにスイイ。

<5-2、(塩)辛い>竹野でカレー、豊岡でシオカレー（優勢なのは、おそらくシオカリャー）。

<5-3、くすぐったい>竹野、豊岡ともにコソバイイ。

<6-29、一昨日>竹野でオトツイ、豊岡でオトツイとオトトイの揺れ。

<6-31、味がうすい>竹野、豊岡ともにミズクサイ。

<6-38、煮る>竹野、豊岡ともにタク。

<6-45、ナオス（片づける）>竹野では使うが、豊岡では使わない。

<6-3、ものもらい>竹野、豊岡ともにメボ。

<6-7、お手玉>竹野ではイチモンヨー、豊岡ではイシナンゴ。〔鎌田良二（1981）には、豊岡市と香住町にオジャミの形のあることが的確に指摘されている。〕

<6-9、顎>竹野でオトゲエ。

<6-17、かつぐ（材木を）>竹野でカタゲル。

<6-18、かつぐ（天秤棒を）>竹野でニナウ。

<6-19、かつぐ（二人で）>竹野でサシニナイ（スル）。

<6-23、あぐらをかく>竹野ではアグラカクとジョラクムの揺れ、豊岡ではアグラカク。

Ⅳ この報告に取り上げた範囲で、集団内の揺れ（△）の見られるもの、すなわちいずれか一つをその地の代表形としにくいもの、を整理しておく。共は共通語形、方は方言形である。

1、いくら（共）と、なんぼ（方）<相手をどう待遇するかによって揺れたり揺れなかったりする。> 2、すてる（共）と、ほかす（方）<揺れはおおむね生活圏> 3-1、降っている（共）と、降るとる（方）<生活圏を離れて。生活圏では「ふっとる」優勢。> 3-2、から（共）と、しけえ（方）<揺れは男性だけ。かつ、生活圏と大阪。女性は生活圏で「しけえ」優勢、生活圏以外で「から」優勢。> 4、いた（共）と、おった（方）と、おんなった（方、尊）<揺れはおおむね話材人物が相手より上の場合> 5-1、餓っぱいと、酸い<揺れは女性。> 5-2、しょっぱい（井上は新方言とする）と、しおからいと、からい<この揺れを見せるのは生活圏における男性と、東京における男女。> 5-3、こそばい（方）と、こしょばい（方） 5-4、（腕時計を）すると、つけると、はめる 5-5、（蚊に）さまれたと、かまれた 5-6、<「せんひき」という新方言はない。> 5-7、おしびんと、がびょう<揺れは女子、東京> 5-8、（ホッチキスの）はりと、しんと、は 5-9、スコップと、シャベル<女子だけ> 5-10、びりと、びりけつと、べべ<生活圏でだけ>

鎌田（1989）には、各地点、成人層男女各1名、少年層男女各1名の調査の結果が示されている。この、城崎における少年層男女の結果と本報告の結果の相違するところを次に摘記しておく。

- イ 共通語（時に準共通語）間に揺れの見られることもあれば、方言間にも揺れの見られることがある。
- ウ 新方言、あるいは真田信治（1990）に言う neo-dialect（方言形への標準語形の干渉によって成立した新形）らしい語に出会うことがあるが、これは同一地点の、数年ごとの継続調査を必要とする。

参考文献

- 井上 史雄（1985）『新しい日本語——《新方言》の分布と変化——』明治書院
- 岡田荘之輔（1977）『但馬ことば』但馬文化協会
- 加藤 和夫（1987）「京都・兵庫北部地域における方言の動態」（『関西方言の動態に関する社会言語学的研究』〈Aとする〉所収、代表 徳川宗賢、非売）
- 加藤 正信（1985）「被調査者の人数・条件、質問方法による差」（国立国語研究所『方言の諸相『日本言語地図』検証調査報告』〈Bとする〉所収、三省堂）
- 鎌田 良二（1979）『兵庫県方言文法の研究』桜楓社
- （1981）「兵庫県の方言語彙——言語地図とその解釈——」（『甲南女子大学研究紀要 17』）
- （1987）「近畿・中国両方言の表現形式の地理的变化」（『A』所収）
- （1989）「近畿・中国境界地帯の方言動向」（『先の紀要 25』）
- 国立国語研究所（1966）『日本言語地図 全6巻』大蔵省印刷局
- 真田 信治（1984）「方言地図の読み方」（『日本語学』1月号、明治書院。のち真田（1989）『日本語のバリエーション』アルク、に収録）
- （1985）「語アクセントの地域差と個人差」（『B』所収）
- （1990）『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院

附記 本稿は、関西大学学部共同研究費（平成元年度）による成果の一部である。